

昔の遊び⑥ お手玉

2011, 8月

大阪 川崎 眞澄

寒い季節がやってくると、教室の後ろに座り込んで、3～4人で輪になり、お手玉をしていました。母親やおばあちゃんの手作りのお手玉を小さい袋に入れ持ち運んでいました。

5つのお手玉から、親玉を1つ決めます。「お手玉うた」に合わせて、遊びます。が、これは、初めに、子どもたちに披露するだけにします。次に、お手玉2つや3つを使って、2つ玉交換や3つ玉交換を披露します。これで、子どもたちのお手玉モードは急上昇です。

このやりたいモードを下げないためには、簡単にできるものを提示していきます。「これできる?」「できたね。」「これできる?」「できたね。すごーい!」と、言う調子で進める。

お手玉1つ技

- ① 両手で30cm位上げて、両手で受ける。→10回続けてみよう。
- ② 右手で " 右手でうける。→10回続けてみよう。
- ③ 両手を合わせて玉をほうり上げ、落ちてきたら、両手で玉を突き上げる。繰り返す
- ④ 右手で玉をほうり上げ、落ちてきたら、右手で玉を突き上げる。
- ⑤ 右手で、ほうり上げ玉が落ちかけた寸前に、右手で上からわし掴みで取る。



「とんとんぱっあ!」のリズムで、玉を突く。

- ⑥ ④を2回(とんとん)と⑤を1回(ぱっあ!)
- ⑦ " と手の甲で1回(すぐに掌を下に向ける)
- ⑧ 右手、左手、右手と交互に素早く(玉をつくように)移動させる。
- ⑨ 右手の甲、左手の甲、右手の甲と⑧のように、移動させる。

利き手でできるようになったら、反対側の手でもできるようにしよう。

「あんたがたどっこさ」のうたに合わせて、「さ」のところで、ちがう動作をいれる。など、リズムよく進めると楽しいです。上の学年ほど、①②は、すぐに進める。

お手玉2つ技（2つ玉交換）

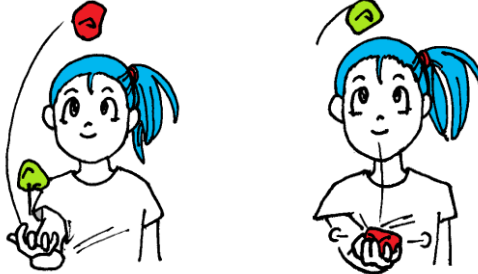
<片手技>

- ① 右手に2つの玉を持つ。1つだけ（指先の方にある玉）ほうり上げて、落ちてくる前に、右手掌の後ろの方にあった玉を指先（人差し指と中指）へ送り、落ちてきた玉を掌の後ろの方で受け止める。

掌で玉を転がして玉を前に送るのが、難しい。



- ② ①の技のバージョンアップ。投げ上げた玉が一番上の位置にあるとき、指先にある玉を上に向けて上げると同時に、落ちてきた玉を受ける。2つの玉は、1つは空中にあり、もう一つは、掌の中にある。（目は、空中の玉の一番高い位置をみる。）



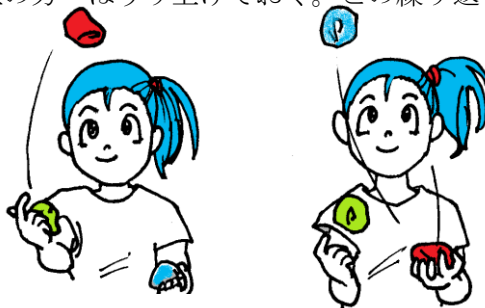
<両手技>

- ③ 右手と左手に1つずつ玉を持つ。放物線をかくように、同時に右と左の玉を交換する。
④ 右手の玉は30cm位上げて、左手で受けるが、その前に左手の玉を右手に、手渡しのようにして移す。（目は、この時も空中の玉の一番高い位置をみる。）

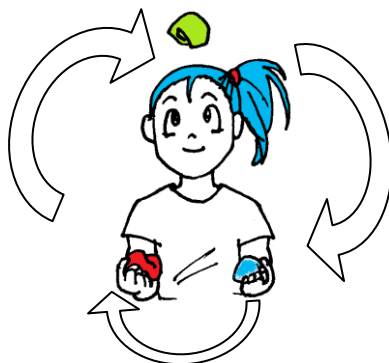


お手玉3つ技（3つ玉交換）

- ① ジャグリングのように、右手に2つの玉、左手に1つの玉を持って構える。右の1つの玉をやや左の方へほうり上げたら、左手で受け取るのだが、その前には、左手に持っていた玉をやや右の方へほうり上げておく。右手も同様に、落ちてきた玉を受け取る前に玉をやや左上の方へほうり上げておく。この繰り返しです。



- ② 3つの玉を1つの輪を描くように行う技です。右手に2つ、左手に1つ玉を持って構える。1秒間に右手の2つの玉をちよつとのずれを取って、30 cm位の高さに、投げ上げる。最初の1つが、左手に落ちてくる前に、左手の玉を右手に少し投げ入れるように移すと同時位に左手には、2つめの玉が落ちてくる。この段階で玉は、空中、左手、右手の位置にある。(速くてよく見えないかも・・・) これを止めることなく続けると、お手玉で輪をかいたように見える。



生活の中に遊びを

席替えごとに4人班を作り、提示した遊びを班で相談して決める。お手玉・けん玉・まりつき・あやとり・(室内ゲーム・縄跳び・外遊び)などで、人気のあるものは、2つの班でも認めた。お手玉・けん玉・まりつき・あやとりは日時を決めて、終わりの会の3分間で、遊びの技を披露させた。室内ゲーム係は、音楽朝会のない朝の時間、縄跳びと外遊び係は、週に2回の休み時間、クラスのみんなで遊ぶ中心になると、約束を決めた。子ども同士で遊んだり、影響し合いながら、日常的に伝承遊びに親しんだりしてほしいと願って始めたが、5分という短い休憩でも、さっと取りかかって遊ぶ。3分という時間を意識して発表する。友達の技が成功したら自分のことのように喜ぶ。そんな姿が見られた。(2010年度3年生)

イベント的な出し物に(お手玉の例)

10人位がよいがリーダーを決め、童謡に合わせて自分たちで組み合わせたお手玉の技を披露する。お手玉の場合は、「証城寺のためきばやし」が合わせやすい。4年生で、舞台発表という機会があった。私もアドバイスはしたが、簡単な技から、難しい技へと工夫し、最後は、盛り上がりの技を入れて、子どもたちが構成した。発表する子ども達の姿が、生き生きとしていたのがかわいかった。